

地方の空洞化と若者の地元志向

—— フラット化する日常空間のアイロニー ——

土 井 隆 義

1. 地元への志向を強める若者たち

(1) 2人のK青年にみる地元志向

2008年6月に東京の秋葉原で、17人無差別連続殺傷事件を起こした当時25歳のK青年は、ネット掲示板にケータイから書き込んでいた自分のメッセージに対して、誰からも反応が返ってこないことに疎外感を強めていったといわれている。犯行の現場でも、直前まで予告文を何度も書き込み、反応を待っていた。しかし結局、誰からも応答はなく、ついに決行に至ってしまう。

そんな彼にも、郷里の青森県に住むかつての級友たちから、たまにメールが届くことがあった。彼は、そのメールを受け取ったときの感想を、こうネットに書き込んでいる。「ほんの数人、こんな俺に長いことつきあってくれてた奴らがいる。全員一斉送信でメールをくれる。そのメンバーの中にまだ入っていることが少し嬉しかった。」

ネットの世界で孤立していた彼にとって、旧友たちから届くメールは、いつかときの救いだったのかもしれない。しかし当時、勤め先の工場がある静岡県に住んでいた彼が、職場などのリアルな世界で、特段に孤立していたという事実はない。居酒屋などでの飲み仲間もいれば、秋葉原ツアーへ一緒に出かける趣味仲間もいたという。

このような事情を考えると、旧友からのメールに対する彼の感想には、友だちを懐かしむ何気ない言葉のように見えて、じつはそれ以上の含意があるように思えてくる。じっさい、彼の犯行は、彼自身の言葉を借りれば、高校以来ずっと続いてきた「負けっぱなしの人生」を強制終了させる手段だった。犯行の対象については無関心で、「被害者は誰でもよかった」のもそのためだろう。

K青年にとって、秋葉原のあの交差点は、理想的な人間関係から疎外されてしまった自分を誇示するための舞台だった。だから、運悪くその場に居合わせた被害者たちも、けっして恨みや怒りの対象ではなく、舞台を成立させるための道具立てにすぎなかった。しかしその裏には、「中学時代までは幸せだった」と語っているように、かつての地元での人間関係を理想的に思い描き、そこへの回帰を願うメンタリティが、眼前の人びとへの無関心と相反するように潜んでいる。

この青年は、自分のケータイ端末のアドレス帳やメールの送受信記録を、犯行前にすべて消去していた。自分が逮捕された後で、知り合いや友だちが警察から事情を聴かれるのを防ぐための配慮だったという。一方で何の落ち度もない人びとを17人も殺傷しておきながら、他方で「周囲に迷惑をかけたくなかった」と過剰に気づかう意識の落差が、ここには見受けられる。そしてこの落差は、地元つながりのように安定した人間関係への憧憬の強さを象徴しているようにも思われる。

この事件から遡って同年の3月には、秋葉原のK青年が模倣したと供述する無差別殺傷事件が、茨城県土浦市でも起きている。JR荒川沖駅の構内で、同じくKをイニシャルにもつ当時24歳の青年が、8人を連続殺傷した事件である。こちらのK青年は、事件の4日前に同市で起こした最初の殺人の後、しばらく秋葉原に潜伏していたものの、そこから遠くへ逃走することもなく、逆に再び地元へ舞い戻ってこの事件を起こしている。

このような経緯から推察すると、こちらのK青年も、地元志向への強いメンタリティを同様に有していたように思われる。彼は、自分が通った小学・中学・高校を襲撃する事件も計画していた。表面上は、地元の人間関係を理想化していた秋葉原のK青年と真逆の行動のように見えるが、地元へのこだわりの強さを示している点では、むしろ共通しているとみたほうがよい。その思いの強さが、逆向きに表出されただけなのである。

(2) 地元から移動しない若者たち

2人のK青年に共通して見受けられる地元への強いこだわりは、けっして彼らだけのものではない。この2人ほど極端ではないにせよ、同様のメンタリティは、今日の若者たちに広く見受けられる。近年は、「おな中」と称し、地元での中学時代の級友との関係を卒業後もずっと保ちつづけたら、「ジモティ」と称し、地元つながりの人間関係を重視する人びとが、若い世代を中心に増えているのである。

かつての常識からすれば、若者というものは、地元でのしきたりやしがらみを嫌悪し、その桎梏から逃れようともがく存在だったはずである。だから、鬱陶しい地元の人間関係を完全にリセットしてしまおうと、都会へ旅立つ若者も多かったし、そのような人間関係の軋轢のなかで、いわば葛藤の発露として起こされる犯罪も珍しくはなかった。ところが昨今では、そのメンタリティがまるで正反対のベクトルを示すようになってきている。

三浦展（2005）は、2003年の時点で1都3県に住む27歳～33歳の若者が、5年から10年後にどこに住むかを問うた調査を行なっている。その結果によれば、なんと90パーセントの人びとが、いま住んでいる都県内に住むと回答している。この調査では、1都3県をさらに細かく14区域に区分しても予測してもらっているが、その回答でも、82パーセントの人びとが、将来も同じ区域に住むと回答して

いる。三浦の言葉を借りれば、「春日部の人は大宮には引っ越さない、厚木の人は横浜に引っ越さないという数字である。」ほとんどの若者が、いま住んでいる沿線や地域に固定したまま、今後もずっと生活を営んでいこうと思っているのである。

また、堀有喜衣（2005）によれば、近年の若者のなかには、地元の生活圏内で就職しようとするあまり、職を見つけられずに結局は無職になってしまう、あるいは、いったん職に就いていても、地元を離れるのがいやで転勤命令を拒否して退社してしまう、といった事例も目立つという。もちろん、進学や就職などを契機に、地元を離れていく若者たちが見られないわけではない。しかし、たとえ地元を離れた場合でも、近年の若者たちは、やはり地元の人間関係にウエイトを置いた生活を営んでいこうとする志向が強いという。そして、ケータイを最先端に置く今日のネット環境の普及が、その志向の実現を容易なものにしている。

今日では、ケータイ・メールを介することで、いつ、どこにいても、つながりたい相手と即座につながりあうことが可能である。たとえ時間と空間を異にしている、その制約を超えて人間関係がたやすく築かれるようになってきている。そのため、進学や就職を機に、互いに離ればなれになった人びとが、それでもなお地元つながりを保持していく手段として、ネットというメディアが活用されるようになってきているのである。

(3) 空洞化した郊外を漂う人びと

では、今日の若者たちが憧憬を示す地元とは、それほど豊かな社会環境に恵まれた世界なのだろうか。彼らを惹きつけてやまないほど、多くの魅力に満ちあふれた世界なのだろうか。いや、そんなことはあるまい。どこの地方でも、地域経済の疲弊が叫ばれて久しいし、都市部の商店街でも、いわゆる「シャッター通り」と化して、活気を失っているところが多くなっている。

その一方で、地方の郊外を走る幹線道路沿いには、全国チェーンの大型ショッピングモールが無機的に整然と建ち並ぶようになってきている。ほとんど似かよった構造の建築物が全国に広がり、どこを訪れても画一的なその風景の連なりは、あたかも環節動物が延々と横たわっているかのようである。三浦展（2004）は、日本各地に広がるこのような光景を「ジャスコ化」とか「ファスト風土化」などと呼んでいる。

平日には、自宅から職場までクルマで移動し、大企業やその下請けなどで、またファストフード店やコンビニなどで、派遣社員やフリーターとして働く。休日には、自宅からショッピングモールまでクルマで移動し、必要な商品はそこの店舗ですべて買いそろえ、レジャーもそこの娯楽施設ですべて済ませ、またクルマで自宅へ舞い戻ってくる。このように環節化した世界のなかで自己完結した日常生活を営んでいるかぎり、地方に固有の文化に触れる機会はない。これは、地元の歴史性に根ざした物語の空洞化でもある。

このように、昨今の日本の地方部では、地場産業の空洞化が進むと同時に、地場物語の空洞化も進んでいる。いわば生産活動と消費活動の両面で、地元の空洞化が進んでいるのである。生きる糧とその意味の双方を提供していた地域共同体がすでに消滅した後の世界を、かつて漫画家の岡崎京子は「平坦な戦場」と呼び、たとえば『リバーズ・エッジ』のように、この空白地帯を生きる若者たちの虚ろな姿を好んで描いた。ところが、今日の若者たちは、このような世界に対して逆に強い憧れを抱くようになっているのである。

それでは、今日の若者たちは、空洞化した地元での人間関係のいったいどこに強いこだわりを覚え、惹きつけられるようになっているのだろうか。空洞化したにもかかわらず、地元志向が強まっているのはなぜだろうか。この問いに答えるためのヒントは、おそらくこの地元の空洞化のなかにこそある。じつは地元の空洞化が進行してきたからこそ、そこへの志向も強まっているとみるべきなのである。ただしそれは、すでに失ってしまったものへのノスタルジーという意味ではない。

たしかに、日本各地の郊外は空洞化してきた。しかし、それは、地方の固有性が失われたことと引き換えに、生産や流通の地域差が縮減され、日本のどこでも同様の消費文化を享受できる環境が整ってきたことをも意味している。いまやどんな地方でも、大型ショッピングモールへ出向きさえすれば、大都会で流通している商品と同様のものを入手することができる。やや逆説じみた言い方をすれば、地方郊外の画一化は、そこに生きる人びとの欲望の多様化を牽引してきたのである。

このような側面に着目すれば、地元の空洞化をもたらした社会の流動性の高まりが、多くの人びとに存在論的な不安をもたらし、その不安を解消するための反動として、地元つながりへの憧憬が強まっているといえるのではないだろうか。その憧憬の強さは、揺るぎない絶対的な拠り所への渴望感が高まってきた結果なのである。以下では、転倒しているように見えるこのメンタリティの機序について考えてみたい。

2. フラット化した日常の不透明さ

(1) バーチャルに構築される地元

『木更津キャッツアイ』は、千葉県の一地方都市に住む若者たちが、日々の生活のなかで繰り広げるエピソードを描いた作品である。2002年にTVドラマとして放映された当時は、視聴率があまり振るわなかった。しかし、放映終了後のDVD化によって人気に火がつき、その波によって映画化された2作品も大ヒットとなった。

この番組を企画するにあたって、当初の案では、木更津だけでなく、西船橋や川口などもロケ地の候補として挙がっていたという。その題名に反して、ドラマ

の舞台が木更津でなければならない積極的な理由はなかった。その意味で、このドラマは、今ほど指摘したように、まさしく空洞化した地元を舞台とした物語である。しかし、そこで彼らが営む日常は、物語を失った郊外での鬱々とした日々ではない。むしろ逆に、魅惑的な物語に満ちあふれたファンタジーのような日々である。

この作品が多くの若者たちの心を捕まえたのは、地元つながりの人間関係に対する彼らの憧憬に、おそらく的確に応えたものだったからだろう。もちろん、この作品に描かれていたような人間関係を現実の世界に見出すことは難しい。しかし、だからこそ、いわば人間関係の理念型として、視聴者の心をうまく掴んだともいえるのではないだろうか。

今日、客観的な事実としては、たしかに地方各地から固有の物語が失われている。しかし若者たちは、その空白地帯からの離脱を目論むのではなく、むしろ逆に、自分の精神的な拠り所をそこに見出そうとする傾向を強めている。彼らの主観的な世界では、地元は空白のままではなく、魅力的な物語を見出すための新たな場所であり、その可能性を秘めたフロンティアとなっているのである。

今日の若者たちが、地元つながりに理想的な人間関係を投影しうるのは、先ほども指摘したように、ネット・コミュニケーションの発達に依拠するところが大きい。ネットを介した人間関係では、不都合で面倒な人間とはいっさい触れあうことなく、自分にとって心地よい相手とだけ、即座に関係を築くことができるからである。

また、都合のよい相手に限定された人間関係の内部でも、彼らが理想とする人間関係を保っていくためには、多種多様な情報をさらに縮減していかねばならない。ネット・コミュニケーションでは、特定の情報だけを送受信することで、ノイズになる情報のカットも容易であり、人間関係を意図的に操作しやすい。ネットのこのフィルター作用によって、理想と見合うように関係を純化させていくことも容易になっている。

もちろん、彼らのコミュニケーションが、ネット空間のなかで閉じられているわけではない。しかしネットは、世代間のしがらみから切り離された同世代だけのコミュニケーションを容易にしてくれる。また、趣向の合う相手との濃密なコミュニケーションも容易にしてくれる。現実には地元を離れ、ネットだけで地元とつながっている人びとにとっては、じっさいに地元の人間と出会う機会が少ない分だけ、なおさらのことそうだろう。

かくして、じっさいに地元に住んでいる人びとは雑多であるし、そこには多種多様な情報もあふれているはずだが、彼らが追い求める人間関係にとって不都合な人びとや、あるいは余分な情報が、互いのコミュニケーションの対象から除外されることで、そこに地元つながりの理念型が形成されやすくなる。彼らのあいだで再生されつつある地元とは、じつはネットを媒介としたバーチャルな地元、すなわちジモトなのである。

(2) 消失したプッシュ・プル要因

では、今日の若者たちのあいだに、そもそも地元への憧憬が強まっているのはなぜだろうか。かつて、少なからぬ若者たちが、地元での生活やその人間関係に鬱陶しさを覚え、そこからの離脱傾向を示しがちであったのは、地元固有の文化やそれに根ざした人間関係が、ひしひしと迫ってくるような抑圧感を彼らに与え、人生の可能性を束縛する桎梏のように思われていたからである。また、それに対して、都会の文化の華やかさとその生活の軽やかさは、人生の可能性を広げてくれる魅惑的なものと映っていた。すなわち、地元への嫌悪と都会への憧れとは表裏一体の関係にあった。

ところが今日では、先ほども指摘したように、社会の流動性の高まりから生じた地方の空洞化によって、地元固有の文化や人間関係がかつての拘束力を失っている。そこは、もはや強い抑圧感を覚える場所ではなくなっている。また、それと同時に、巨大なショッピングモールというインフラも整備され、地元に住ながらにして多種多様な欲望を実現させることが、少なくとも消費文化の面においては容易になっている。

このように、地元の文化や人間関係の影響力が低下したことによって、かつて若者たちを地元から押し出していた要因(プッシュ要因)は消えていった。また、さまざまな大型商業施設が地方に整備されることによって、彼らを都会へと引き込んでいた要因(プル要因)も消えていった。このような事情は、非行少年たちの活動範囲の局域化という現象にもよく表われている。

かつての少年犯罪が、都市の繁華街などをその主たる舞台としていたのに対して、近年の少年犯罪の多くは、オヤジ狩りがその典型であるように、一般住民に身近な郊外住宅地で発生するようになってきている。かつてなら、たとえば会社勤めが終わった後に繁華街をうろついたりなどしなければ、非行少年と出会うこともなかったはずの人びとが、昨今では、たとえまっすぐに帰宅したとしても、自宅近くの路地裏などで被害に合うケースが目立つようになってきている。

往年の非行少年たちが都市の夜の街へと吸い寄せられていったのは、魅力的な非行グループがそこに存在し、それに加わることで自分にも箔がつくと感じていたからである。都市の繁華街は、自らの存在を誇示してみせるための舞台装置であり、非行グループはその演技仲間だった。ところが、そのような非行グループがもはや成り立たなくなり、非行文化に魅惑される少年たちも減ってきた。むしろ今日では、都市の中心部へ出て行くことに対して、逆に気後れを感じてしまう非行少年たちが増えている。

また、それに加えて、昨今の大人たちは、もはや少年たちの目に煙たい存在として映らなくなっている。近隣から遠く離れた繁華街でしか自由に振る舞えなかった往年とは違い、自分たちを抑圧する敵としては感じられなくなっている。その意味で、昨今の非行少年たちは、社会という敵をすでに見失っているのである。

こうして、都市へのプル要因が消え去り、また同時にそこへのプッシュ要因も消え去った。繁華街の魅力が減衰すると同時に、非行少年たちの生活圏も狭くなってきた。その結果として、一般の人びとは、かつてよりも少年犯罪を身近に感じるようになり、皮肉にも体感治安を悪化させることになっているのである。

(3) 不透明さを増した今日の社会

このような事情が進行するなかで、「東京」に象徴されるような都会的なものへの憧れが、若者たちのあいだで急速に衰えてきたのは事実だろう。しかし、このような事情だけで、それと並行して高まってきた若者たちの地元志向の強さを説明することは難しい。彼らは、たんに消極的に地元つながりの人間関係に留まっているというよりは、そこに対してむしろ積極的に憧れを示すようになっていくからである。

今日の若者たちが、新たな物語のフロンティアとして地元つながりを捉えるようになってきているのは、従来の抑圧的な物語がすでに失効した場所だからというだけではない。また、そこへの愛着心が強まっているのも、居ながらにして多種多様な消費欲求を満たせる場所になったからというだけではない。その両面で地元の空洞化をもたらした社会の流動性の高まりは、もっと積極的な意味において地元への志向を強めているはずである。

現在の日本には、さまざまな価値観が併存し、互いに競合しあっている。どんなに確実と思えた価値判断であろうと、別の観点から眺めなおした途端に相対化され、たちまち否定されてしまいかねないような事態が進んでいる。人びとの価値観が多様化し、そこから序列性も失われ、いったい何を拠る所に生きていったらよいか分かりづらくなっている。社会の流動性の過剰な高まりは、人生の行方の不透明さを増し、不安に満ちたものになっているのである。

今日、若者たちがもっとも嫌悪するのは、「上から目線」でものを言う人物である。そんな人物に対して嫌悪の視線を向けるだけでなく、自分自身もそう見られないように細心の注意を払っている。日常の何気ない会話においても、できるだけ断定口調を避けつつ「ぼかし表現」を駆使し、自分の意見や態度の表明が相手に押し付けがましくならないように気を配っている。

お互いにタテの人間関係になることを極端に嫌うのは、彼らの抱えている平等感覚が非常に強いからだろう。今日のように社会の流動性が増して人びとの価値観が多様化してくると、従来のような価値判断の序列性は失われていくから、それは当然ながら人間関係にも影響を及ぼすことになる。どのような生き方を選択するのも個人の自由であり、そこで必要とされる能力も選択によって異なるのであれば、普遍的な優劣の基準などどこにも存在しないことになるからである。

平たくいえば、ある場面で尊敬される人物でも、それはその場限りのことであって、それが人間としての優秀さを意味するわけではない。別の局面では、まったく別の判断基準が存在し、そこで評価を得るのもまた別の人物である。こうい

った現在の社会の空気は、すでに多くの若者たちに共有されている。かくして、人間関係とは基本的にフラットなものだという感覚が、彼らのあいだには広まっている。

このような面から考えるなら、今日の若者たちにとって、地元つながりは、どんなに熱意ある選択であっても、別の立場からすぐに冷や水を浴びせられやすいこのフラット化した世界で、もはや残り少なくなった絶対的な拠り所の一つと感じられているのではないだろうか。絶対的な拠り所は、多義性をはらまない明快なものでなければならない。昨今の地元は物語の空白地帯となってきたがゆえに、かえって相対化の視線を免れることができ、したがって皮肉にも、揺るぎない拠り所として感受されるようになってきているのである。

3. 多様性の時代の存在論的な不安

(1) 関係への依存度を高める若者

今日の若者たちが、今ほど述べたように上下の人間関係におちいることを避けようとするのは、本来はそれがフラットなものだと感じているからだけではない。いわば強迫神経症のように、対等な関係の維持に躍起とすらなっているのは、関係が傷つけば自分も傷ついてしまうと、かつて以上に強く感じるようになっていくからでもある。

今日の社会では、たとえば自分の信念や信条といった抽象的な観念も、あるいは自分の知識や技能といった具体的な能力も、自分の拠り所として役立たせることが困難になっている。そういった自らの内面に属するものによって自己肯定感を保ちつづけることが難しく、その代わりに、身近な人間関係によって自分を支えようとする傾向を強めている。

過去を振り返ってみると、従来の社会には、若者たちの多種多様な生き方を否定し、支配的な価値観に強制的に適応させようとする文化的な圧力が強く働いていた。もちろん若者たちは、そんな支配文化をただ受け入れるだけの存在ではなかった。それに対して反旗を翻し、抵抗を示そうとする存在でもあった。だから、そこに対抗文化が作られることもあり、その最たるものが先ほど触れた非行文化だった。かつての非行少年たちは、そういった反社会的な価値意識を絆として、お互いに団結しあっていたのである。

しかし、反社会的な非行文化にせよ、あるいは社会に順応した優等生的な文化にせよ、いずれの文化に属していたとしても、周囲の人のびとから高く評価されやすい人間とそうでない人間の判断基準は、割合に明瞭なものだったといえる。非行文化とは支配文化への反動として形成されるものだから、双方では評価の基準が反転しているだけである。たとえば、大人たちに高く評価される行為は、彼らの仲間内では蔑まれたし、逆に大人たちに反抗的な態度をとれば、仲間からは賞賛された。いずれの文化の下でも基準自体は明瞭だったのである。

しかし、今日の若者たちは、少なくとも建前としては、多様性を称揚するような文化のなかで生活を送るようになってきている。しかし、ここで留意しなければならないのは、いくら多様性が称揚されるといっても、あらゆる可能性が社会に受け入れられているわけではないという点である。当然ながら周囲の期待に沿うものでなければ、彼らが高い評価を受けることはない。

そのため、今日では、従来のように画一的な評価の物差しを一方的に押し付けられることは激減したものの、その代わりに、周囲の人間から個別具体的な評価を、その場その場で逐一に受けなければならなくなっている。平たくいえば、その場にいる人間からのウケを狙えるかどうか、若者たちの自己評価において非常に重要な判断材料となっているのである。

今日の若者たちが、人間関係に対する依存度を高めてきた背景には、おそらくこのような事情があるのだろう。かつての文化の下では、それに従うにせよ反発するにせよ、評価の明確な物差しが存在していたため、ときどきの場の空気や気分によって、個別の評価が大きく揺らぐことは少なかった。しかし、多様な生き方が賞揚される今日では、普遍的で画一的な評価の物差しによってではなく、個別の場面で具体的な相手から承認を受けることで、自分の評価を見定めていかざるをえなくなっているのである。

(2) 同質な人間関係へのこだわり

明確な評価の物差しが社会に存在していた時代は、それに順応するにせよ反発するにせよ、その判断基準を自分の内面に取り入れ、自己評価の拠り所とすることで、私たちは自己肯定感の基盤を確保することができた。自分の信念にしたがって生きるにしても、その信念の正しさの根拠が、たんなる自分の思い込みなどではなく、自分を越えた普遍的な地平にあると思えたからである。いわば社会的な価値基準の客観性が、自分の判断の羅針盤になってくれていたのである。

このように、揺らぎにくい人生の羅針盤が自己の内面で作動していた時代には、それを拠り所とすることで、自律的にふるまうことも割合に容易だった。周囲の身近な人間からの一時的な評価は、相対的に軽いものでありえた。それを過剰に気にかけることもなく、場合によっては、「自分の信じる道を行く」と孤高にふるまうこともできた。自分が進んでいる方向は正しいはずだと確信することができ、たとえ今は周囲の人たちに理解されなくても、いずれは分かってもらえるはずだと素朴に期待をかけることもできた。

ところが、今日では、そのように安定した評価の物差しが成立しづらくなっている。現在の日本では、かつてより多様な生き方が積極的に認められるようになり、人生の選択肢は確実に広がっている。男性なら良い学校へ行って良い会社に入らなければならないとか、女性なら適齢期に結婚しなければならないとか、そういった社会的な圧力は、まだ完全に消え去ったわけではないが、かつてよりは確実に下がっている。

このように価値観が多様化してくると、そこでどんな選択肢を選んだとしても、それを選んだことの優越的な根拠はなくなっていく。別の選択肢の可能性がいつまでも意識のなかに残り、いま自分が選んだものが絶対的なものだとは思えなくなる。その結果、現代人は、絶えざる不安を抱え込んでしまうようになっている。このとき、私たちは他者の反応にすがること、自らの選択の客観性を確保しようとする。そこに判断の根拠を求めようとするのである。

今日では、明確な判断の基準をもちえないため、つねに場の空気を読んで、周囲の人たちの評価を確認していかなければ、いま自分が向かっている方向は本当にこれでよいのか、その確実な保証を得ることができなくなっている。自分の内面で人生の羅針盤が作動していないため、その代わりに高感度の対人レーダーを作動させ、周囲の反応を探りつづけて、それを自分の物差しにしていかにざるをえなくなっている。それこそが自分の拠り所となってきた。

しかし、ここで期待されている他者とは、自分の拠り所となってくれるものだから、できるだけ自己承認を得やすいように立場の近い相手を求める傾向が、自ずと強まってくる。双方のあいだには、あらかじめ客観的な評価の物差しが存在しているわけではないから、相手が自分に対してどんな評価を与えてくれるか、前もって予想することは難しい。その評価は、ときどきの空気しだいで簡単に変化することも多く、非常に不安定なものである。そのため、できるだけ人間関係に安全パイを求め、自分と似かよった同質的な人間だけとつながろうとする傾向を強めていくのである。

(3) 不満の時代から不安の時代へ

昨今の日本では、新自由主義的な経済政策の下で、就労機会においても、消費活動においても、そして社会的地位においても、さまざまな局面で多くの基準がたえず動揺しつづけて、過剰な流動化の波に揉まれている。しかし同時に、現在の日本は、かつてのように全体のパイが拡大する社会でもなくなっている。むしろ格差社会化と呼ばれるように、延々と経済停滞が続くなかで、限られたパイの取りあい合戦が始まっている。

今日では、社会の流動性が高くなっているからといって、洋々たる未来の可能性が拓けているわけではない。むしろ逆に、現在の居場所を失うかもしれない不安定さのほうが増している。今日の流動性の高まりは、上昇階段の存在をイメージさせるものとしてではなく、むしろ現在の梯子が外されるかもしれない不安を煽るものとして感受されるようになっているのである。

未来が輝かしいものではなく、不安な現在の延長でしかありえないとしたら、そこで関心の対象となるのは、「私はどこへ行くのか」ではなく、「私はどこから来たのか」だろう。未来の自分を構想することには意義を見出せず、自分の根源を探す旅へと精力を注ぐようになる。このとき、自分が生まれ育った地元は、その根源を強かに感じさせる場所として感受されることになる。

昨今の若者たちが地元志向を強めているのは、いかに生きるべきかを指し示す人生の羅針盤がこの社会のどこにも見当たらず、いわば存在論的な不安を抱えているからである。だから、どんな視点からも相対化されることのない不変不動の準拠点として、地元つながりの人間関係に強いこだわりを見せることになる。それは、自分の自由意思で選択できるような相対的なものではなく、生涯にわたって変化を被ることのない生来的な自己属性の一部と看做されているのである。

しかし、いくら今日の地元が意味の空白地帯であるとはいえ、現実には雑多な人間が暮しているのだから、相対化の視線から完全に逃れることはできない。彼らの追求める地元が、多義化の危険をさらに徹底的に削ぎ落としてバーチャルに同質化された地元、すなわちジモトであるのはそのためである。この意味において、彼らの地元志向の強さは、現代社会における流動性の過剰な高まりと、そのなかでフラット化してきた人間関係への反動とってよい。

また今日では、人間関係がフラット化した結果、他人から自分が傷つけられているという被害感覚も生じやすくなっているといえる。それがひるがえって、自分も知らないうちに他人を傷つけているかもしれないという加害感覚にもなっている。このような状況のなかで、自己実現の意味合いが、かつてと異なってきても不思議ではない。見知らぬ人間に囲まれた社会の大海へと漕ぎ出し、そのなかで大いなる飛躍を目指そうとするよりも、むしろ逆に、見知った狭い人間関係のなかで誰からも傷つけられず、また誰かを傷つけることもなく、自分らしさを失わずに地道に生きていこうとしても不思議ではない。

このことは、特定の生き方を強制されなくなったという点では、現在のはたしかに不満の少ない時代かもしれないが、しかしそれゆえに、いったい相手が何者であるか根本的には分からないまま、不透明な相手とつねに向きあって生きなければならないという点で、そして、自分が何者であるかも根本的には分からないまま、不透明な自分とつねに向きあって生きなければならないという点で、同時に不安に満ちた時代でもあることを示している。「不満の時代」から「不安の時代」へと、すでに日本社会は移行しているのである。

本論の冒頭で、秋葉原で事件を起こしたK青年は、ネットの世界ではたしかに孤立していたが、職場などのリアルな世界では、特段に孤立していた様子はないと述べた。しかし、その外見上の様相に反して、「現実でも一人、ネットでも一人」と、彼自身はネット掲示板に書き込んでいた。掲示板への参加者から同情を得たいという思惑もあっただろうが、じっさいに彼は、リアルな世界でも主観的には孤立感を深めていたにちがいない。

現実にくら濃密な人間関係があったとしても、それらをニセモノと感じてしまうのは、ホンモノの関係への期待値のほうが圧倒的に高いからである。地元つながりは、そんな彼らの期待を満たしてくれる純粋な関係としてイメージされ、憧憬の対象となっている。だとすれば、その期待値を過剰に押し上げている今日の社会状況こそ、いま私たちが正面から向き合うべき問題のほうである。

文献

- 堀有喜衣 2005「労働研究の立場から」教育研究創発機構公開シンポジウム『「ニート」何が問題なのか』東京大学.
- 三浦展 2004『ファスト風土化する日本』洋泉社新書 y.
- 2005「携帯電話は若者のコミュニケーション能力の低下や、階層格差問題にも波及しているのではないか。』『未来心理』第2号, モバイル社会研究所.

*本論は、「地元からジモトへー空洞化した郊外のアイロニー」の「上」(『月刊少年育成』第54巻(第8号), 8-13頁, 2009年8月)と「下」(『月刊少年育成』第54巻(第10号), 40-45頁, 2009年10月)を統合し, そこに新たな加筆修正を行なったものである。